

スペイン語圏を知る本(その20)

『スペインの島々の本』

評者 坂東 省次

現在、「スペインの誘惑」という本を執筆中であるが、その最後の章でスペインの島々を扱う予定でいる。スペインの島々とは、地中海に浮かぶバレアレス諸島と大西洋上のモロッコ沖に位置するカナリア諸島である。いずれも美しい自然に恵まれ、ヨーロッパ有数のリゾート地として知られている。

スペインの島々を扱った本の数はいくつもない。あっても一冊の本のなかの一部を占める場合が多い。例えば、最近、福田直子著『大真面目に休む国ドイツ』(平凡社新書 2001年)が出版されたが、その第2章「限りなくドイツに近い島」とは、バレアレス諸島のマヨルカ島のことである。「ドイツ人たちにもっとも人気のある旅先は地中海。中でも一番の人気はなんといってもスペインで、マヨルカ島、イビツア島、メノルカ島からなるバレアレス諸島(1999年で410万人)、カナリア諸島(280万人)、スペイン本土やポルトガル(380万人)も好まれる。」

「不思議な町」シリーズの著者、巖谷國士は、今度は、地中海に点々とうかがぶ大小九つの島々を訪れ、『地中海の不思議な島』を昨年、筑摩書房から上梓した。その第8章は「バレアレス諸島」である。マヨルカ島を訪れた巖谷氏はこう紹介している。「総人口は60万強。そのうち半分ほどが西南の湾にのぞむ州都バルマ市に集中し、周囲には風光明媚な海岸、岩山、森林、段丘状の農地、果樹園などがひろがっている。気候も年間を通じて温暖・快適なので、いまではスペインを代表する観光・保養地として広く知られ、この町の空港の利用者数はヨーロッパでも一、二を争うほどだという。」

アントニオ・ガウディ研究者の鳥居徳敏は、「マヨルカ島地中海に浮かぶリゾート地」(『地中海歴史散歩Ⅰ スペイン』河出書房新社 1997年)の中で、マヨルカ島観光の目玉商品として、鍾乳

洞をとりあげている。「観光地としてのマヨルカの最大の目玉商品がこうした鍾乳洞の見学にあり、今世紀初頭の定期船航路の開設とホテル建設で観光地マヨルカが生まれた。正しく自然がつくり出した地上と地下の二つのマヨルカがリゾート地誕生の基礎にあった。」

マヨルカといえば、フランスの女流作家ジョルジュ・サンドと天才作曲家にしてピアニストのショパンが愛の逃避行をした島としてもあまりに有名である。1838年から1839年にかけての3ヵ月余りの冬のことであった。ジョルジュ・サンドの『マヨルカの冬』(藤原書店 1997年)あるいは、『ジョルジュ・サンドからの手紙』(藤原書店 1996年)は、当時のマヨルカの幻想的な世界に読者を誘う。

また、マヨルカは、画家ジョアン・ミロが1940年8月以来、人生の後半30年を暮らした島でもあった。この島にアトリエをもち、ここから世界の各地にミロは素晴らしい油絵を送りつづけた。それらの作品は、ベレ・A・セラ『ミロとマヨルカ』(美術出版社 1987年)に詳しい。

カナリア諸島に関しては、三宅眞『スペインと私』(三月書房 1990年)の「カナリア諸島」がある。ここは新大陸に向かうコロンブスが船の修理のために寄港した歴史的な場所で、「コロンブス博物館」もある。常春の地カナリア諸島は素晴らしい観光地としてヨーロッパ各国からの観光客で賑わっている。また国際漁業基地としてもよく知られており、スペイン船以外にも、韓国船、台湾船、ソ連船、キューバ船、日本船などがひしめいているという。著者の専門は魚、とくにマグロに長年かかわっており、カナリア諸島とバレアレス諸島で実際に体験した「マグロ戦争」に関する話は、じつに興味深い。三宅は「最後に」で、「寿司屋で食べているマグロ一切れに、どれ程多くの人が命を懸けているのか・・・多少でも理解していただければと思います。」と述べている。世界のマグロ戦に直接かかわってきた著者の苦勞が、ずしりと伝わってくるようだ。

ばんどう しょうじ(教授・スペイン語学)